



重修真書太閤記

十一編
十



へ18 特
門 8
459
卷 110

福兼

消印
福兼

重修真書太閤記十一編卷之廿八

忍の城再度合戦の事

并寄手敗北の事

忍の城要害よく定めらる。城中の諸物頭こころを
一のふして堅固な守りなす。寄手毎度利を
らしかひあまのさへ水攻の計策を仕そん多く
の士卒を誤ち財寶を伝いやせしと關白殿下の御
さくみ入し如尤やらみ諸士こころを伐一のふして
堅城みこもりし方攻及みす。たどり成田と
懇意のその城志つたるやと尋ねたす。山中山

同攻
會印

大目言二編卷廿一ノ
城守長俊連歌のみしとらあまと申上りかひそれ
究竟のとありとく長俊又文かせ成田らめとへ
了意といへば連歌師を法かひとして往復し成田
ら書翰を得たりかひ是を城中へ法かち籠城
のその大か當方へあくるがう成通しひよしを
申されはあまよふ友間のあまを処とひこころ付は
成田をめぐこめたり文或人の日記をこれに山中
連歌を申はちしけし成田もまよのちあちる
籠城のいしし堪以相應の返事成かし法いふ
山中發句を送し成田照を法け成田發句を出し
て山中よりき成このちねどあして往來數度み及

ひらか中は成田の句よ

花のころ月もやこの秋のせら

とあつあは成關白殿下城中へ法かちしかくの
どく諸大名京都へこころ成よまあちるあま
氏政氏直はらみ上京せし自由も官位を申と大不
敬のいさつ形つと申されはあまよふ成田め籠
られし忍へ通路もからしありまろ忍の城より
の小田原へ飛脚をたてて寄手かくの如く籠城か
は不ど堅固み仕りひへとも岩槻松山八王子かど
も落城はるまひはかと承とるをよひ丸をこれの
後援のためにも形く今三四十日の持こころへ申べ

くはへども夫をさしての覽東形かと申はるを
くはども番兵に遣城とらめ成田にはらみ知せ
孫の成田よりハ返事か一文忍の寄手のあまゝる
み水攻をかかゝり水の落たる跡治と形う泥濘
はよく三万五千の人数城へあうびくを
遠々と陣をとり居たりははへ關白殿下の御
下知らして山中山城守忍へ参向し石田治部少輔
淺野彈正少弼も面會し殿下の御下知の巨細を申
のべ山城守より籠城のしめへ文をはりて見
申せりと申けれハ石田淺野いひせもあはへ
くと申はより山城守文あつくとあつくとめ成田

肥前守ののとははらうけり

態と令啓上候當城堅固は御持抱被成候条
關白殿下御感不斜候弓矢取の本意何事う
これに志らん猶以丈夫は御防禦專一は候
併かり下總守殿と長俊多年申通し候好
と云合戦之成行といひ始終の処相談候処
下總守殿御同意關白殿下へ御出仕有べく
の処事露現候て當時下總守殿御取籠被成
候早其城御開渡候とて下總守殿の御本意
たるべくは是等之趣厚く御勘辨專一は候
恐惶謹言

山中山城守

長俊

六月廿七日

成田肥前守殿
忍御籠城中

忍の苗守居成田肥前守この状を披見し山中山城
守と下總守と年來懇意を通し以ていたし
よくまうたるは古き反故然取いて見たるみ
山城守の自筆たるも相違なく去かから城を預
けし下總守との兄弟三人小田原も出さぬ

此事はことあるへく小田原より可なり何
とて沙汰のあはべき筈とおもはれ小田原へ
行し人々上下かけ千人みちかきそのうち
事のよし成告さすはよめかきといふれ
は又山城守と申通せしめあらされ此人々
さし囚とせしといふとこの一事あり誤から
下總守殿關白殿下へ出仕といふともいひ
はへ各ふみとおめをいふやといへ成田大
藏少輔同土佐守新田常陸介松岡豊前守か
口を
おろへいりさぬ肥前守のいふ如くこの状
不審多し之れに寄手の謀計あるへみく我々

叔聞詰上總表抄

をだまして開城させいそぎに追いかけてうち
捕んとすの軍略と志らねらるる志らば此方もだま
して敵を討ちよけよとて返事をいご
まごころ

芳札令披見候下總守と年來御懇意之因縁
を以て當城籠兵共助命の義御芳志辱仕合
み候何様下總守殿下へ出仕候上ハ我等式
何の爲の合戦及ひ可申哉城中掃除其外
修復不見苦やう申付早々開城可仕候日限
從是可申入候恐惶謹言

成田肥前守

六月廿八日

忍籠城之者

進上 山中山城守殿

御返報

山中山城守の返事成得てをわつとを海へたつと
よろこび石田淺野及び諸大將の陣々へ當城
降参かくの如き上ハ仕寄を修復せよも及む
いぬまも休息へしと觸たりしかの佐竹宇都宮以
下の諸大名達成田肥前守をけり剛のその形は
いふかしの城を召さんとせよらん不思議の
事よしけりやきける城中入の名をおしむ侍三百

大目上二編卷十八

二

余人足輕末々かけり千余人ありけはるゝいひし中
義心たゆまぬ勇肝斗のことききものをかりみし
いこの書状入つて一方便してこの不どの眠氣
をたまさそと出ひ法をたるとかとの城より
法かひを出し近日城を御りて申べくまれ又付
雑人むら二百余人をらひ出しはよし城申けるみ
より寄手そ届たりす城答ふそのうち城中よ
り成不ど雑人かるへ一簑笠をみかひ兵糧の苞を
かり腰に法は竹の杖をよばくしそこの出
たり寄手これをまきこれに此邊の地下人の夫は
おられあるべしあかあそこの方がどの何處

石田三成 八徳 馬鹿

へ立退やと問はるそのものどもさうみはれ我々
家の焼も田地の水泥つりたり市しておくべき処
もかといふみよる寄手の陣々へ五人六人つ
ひきりけて去るいあきま堪忍せよやかて地頭
の改まりし時元の田地をかいあつておれ
業をやまきとべして台置られ法かひ城中の
容子茂たづ孫かといけふ子何れも知たるをい
相應みあさへけはみよる心をたうして陣中の水
く海せ薪とらせかどしてささるかせさる然るよ
七月朔日の夜丑の時とゆか不き頃俄に大風吹
いこ陣屋の屋根をやぶりけるみ驚きて

諸方の陣屋は是れ成ふせんとしたるはをさげ
 は石田治部少輔三成の陣より焼亡おこつて
 次第々々焼ゆつ終に諸大将の陣屋をよび
 べつ七十餘棟焼失おまつさへ硝子火の
 陣々々をべつ一同に燃あがりける折にゆかの五
 人六人別居たりし城中の雑人原いづく行
 そのゆへ衛隊あらひよせていづれも狼狽し前後
 混亂の処を見まき城中より三百余人火消の為
 みに喚ぎやうんて切て出佐野天徳寺の陣を散々
 打やぶつたり佐野の陣を破れしかの宇都
 宮の陣へ面もふらひさうさうつりそのくち佐竹

陣ときへく關東の陣々々をさうちやぶり勝
 開あげて城中へ引てりり直に追手の柵のちち
 陥をのくろつ所々城堀をり川水を堰入まじりか
 つりく夜のあくけをまぢけるみ寄手におひひ
 よらぬ夜討み仰天し無念かから取とめて城中の
 兵誰々とも見くらぬはいゆの手の手へむかふべ
 もかゝ夜あけて城中をさるるまのくまぐ立ち
 べたす旗馬をさるるの見る人さるるを落
 たふよやうさるるみくしに打破り押しつり見よ
 やとく柵のちちへここ入の陥におち入手足空
 みりあくるも何りいやう上も落かざるく目をか

ともしいふあやまちたりて城を漸々馳こえて
城門をいれんとまじの堀切いくのともなくあり
十の所もども寄手の大軍ありさくくも方便あり
しつ堀際よりよせしれに城中の兵士いれども
指のうへまゝを竹束のかげふんどまうあふた
り寄手いよし怒りいれかまの降参りから昨日
夜のふはまの心得むと口々々のくしれに城中よ
りぬぬおひせし敷みる城のまのり下總守り殿下
へ出仕と申よよう今日明日のちち入の渡り申へ
しまらら何れへみ我々籠城その詮かすと旗馬
印り引去たりまらら今面々の合戦の用意して

よせたあふとまそ心得ぬ降り城を攻るとい夫
の殿下の旋るといませり寄手も言葉なくあをれ
あまれり扣せり

真田與三郎智謀の事

并忍の城開きつゝの事

山中山城守忍の城よかひ籠城の大將成田肥前
守も書翰出くりけるよよう城中より返書到
来し早々開城仕へくりまらし掃除その不手間
取り間日限の追てと申よよう合戦を止めて諸陣
の仕寄をひきまらざるし陣中不慮に失火及び
本その時諸陣のちち佐野宇都宮佐竹をさめ關

東衆の手へ夜討あつて討死手負をてみ千四五百
人ふ及べり夜あけり城はむかへり城兵ども旗
さしをのをひきまくら茂高くして祓り居たり
是をおどろかす何れへは夜討せしやといへり上
方勢をさす寄手の何れへ降参せし城をせむはや
といふ是をい何とせらるへきと評定はまよぶ
久真田安房守昌幸の次男與三郎幸村いよ二十
餘歳のころ武者ありを侍りまきく之出て申け
當城をひらかせ申べり見のゆるかく古老の歴
歴おちへはしはしはしひかえり罷在り試み御
はかひとて城中へ参り所存の趣を以て取計ひ

申べりやと申けり石田治部少輔三成よりてさ
まが房列の子息なりはぐめり勝れりは智謀もい
へり何れもせよ御所望ふまをへり御入城して
御せらひはしはしはしと許容ふをよみ與三郎
いかにあゆり鎧ぬききて小刀をかりし肩衣袴を
着し十五六の小冠者も刀城かへけさせ馬よりち
のり大手の城戸はむかひ是れ真田安房守の次男
與三郎幸村といふ關白殿下の御旨ふより當城の御
主肥前守といふ申べりとおつて罷りし御門を
御ひらきあるべしと申けしは肥前守ををさす
此方へとて城門をひらく與三郎幸村馬よりをり

六月己二編卷十八

乙

小冠者一人召具一城門入りつる案内よりして書院
み通はやくあつて肥前守これも同く肩衣袴み
八寸さつりの小股差付して座に決り安房守どの
みの御面會申せしともい貴殿みの今日よりめて
對面みをよびい殿下の御旨よりく御越と申と
みいまうしこの殿下の御使とぞんむはつるまう
成田下總々居城みい下總の小田原みまかり在い
殿下の御陣も小田原つちかき小田原つる下總
へ仰らふへきを何とく此処へ御決りひを賜る
いみやと申ける時與三郎奉村答る申さく如何ふ
も殿下より下總どのへ山中山城守一以てたびく

仰入られ下總どのよりあつ意といふ連歌師を以
て御使とく後度と称く仰上られいよその意趣
の殿下と總列より外知たるものもいふ然るま
その下かくまときれと顯せれ終る總列の氏政
朝目の城中みめしこめらし嚴重な番をまゑらし
いまうしこの殿下より御書を法かすけし事も總
列より使をたてまのりし事もあらぬ道理みい去
ども殿下と總列と入魂の事ハ相違なくい總列北
條方みて無二の忠をつくけしおらば面々その
心をこゝろあつて堅固な籠城あるへきをうみい
總列の召籠らしいこの定めて面々もあつたまふ

べし我々も殿下へ通路いづれはよりのくおれ
ハ總列の城をむかひ北條方よりて各々必死をい
たされし事なきえぬとみは早く當城をひらかせ
小田原表かる殿下の御陣へ參上何のく鬼もかく
もして總列を事托へりて城中より取いづては上
夫をいづはるべくいと殿下のあひを思召あつよ
りてその旨申せとの御意よいと申されハ肥前守
も憫然として志を詞かかりけるく大藏豊前か
とを市くは孫手面々もまかせはるべし下總守
どの乃御事ハ殿下と音信いづされはよりのく
籠られはよしか孫手承をよひし事形然ハハ

この城みく殿下の御勢と合戦實まいられおは
らばとやく開城かして去るはべくそんは各々
何とあされハ御分別みやと申けはハハハハ同
意のよくみく幸村もそのよく返答をよみ処へ
下總守氏長の法かひ松岡石見も殿下より神谷備
後守を差そへらせ小田原落城し下總守殿下へ出
仕りのゆきより忍の城早々ひらきつて申へ
より申さくは時は淺野彈正少弼の手のその持田
口みく多くうづれははは深く憤りハハハ城中
のその一騎一駄みく開城せよと申けハハハハハ
城中のその一同み申けはハハハ今日まで我々所領

のぬきあり。志はは間城のうへに牢人みて妻子
を養ふべき。知行か。年來たくとへ。錢穀をもち
いで。こそ。餓死をよまぬか。はくは。あはれ。され。成
た。一騎一駄。みく出たらん。み。五七日のうちに
飢て死をべし。とて。死を。は。のち。形。は。ら。ハ。城
中。み。く。免。も。前。も。ある。べし。と。城。を。い。で。は。この事
殿下の御耳。よ。入。し。か。ハ。重。孫。く。遠。山。右。馬。助。木。下。半
介。を。御。法。う。ひ。み。く。資。財。雜。具。も。ち。形。く。出。城。の。ため
み。取。せ。し。へ。と。仰。さ。し。け。る。み。よ。り。い。の。道。も。入
質。を。と。り。く。城。出。み。たり。た。く。氏。長。か。ら。の。か。ら
多く所持のよ。か。孫。く。ま。こ。り。め。した。る。その外は

成田う所持の黄金千両。上申へくと仰付ら。と
々。ハ。氏。長。黄。金。九。百。兩。か。ら。の。か。ら。十。八。さ。り。上
さ。御。り。び。申。て。その。餘。ハ。ま。の。く。下。總。守
み。た。ま。さ。り。け。り。下。總。守。牢。人。し。て。下。總。國。百。々。塚。村
み。住。け。る。み。關。白。殿。下。小。山。み。御。動。率。所。り。時。氏。長
の。妹。を。御。陣。中。へ。め。さ。し。御。寵。愛。あ。り。た。は。み。その。女
兄。身。の。う。へ。成。歎。を。申。け。る。み。よ。り。野。刈。那。須。の。う
ち。烏。山。み。く。三。万。石。の。地。を。た。ま。さ。り。け。り。或。ハ。氏。長
く。女。あ。り。と。り。云。み。や

成田系圖。ハ。氏。長。の。嫡。子。左。衛。門。尉。氏。範。の。妹
甲。斐。姫。と。い。ハ。太。閤。の。妾。と。あ。り。この。時。烏。山。一。万

貫の地をたよみといふ
 關白殿下尾張國中村よりまねたよひ自隸じりき不起
 將帥しやうしゆとありはいみ則關すなはちの大臣だいじんのぶの長曾
 我部を降し九列を平均へいきんし北條を討て關東ハケ
 國威こくゐ撫し陸奥出羽の遠境とんげんをよみ介曹けいそうの士
 矢石やせきの難をわたりて去りもその勲勞くんらうありひ
 十年ありひ廿年の久し平城へいじやうのえてその禄
 といふ百石二百石の増減ぞうげん猶なほかき去りはみ
 一箇いっかんの妖女ようにょをのり一二寢いんのあいつみ三万石の
 地を進退しんたいひこれ殿下てんげ蕘たきして墳土ふんちいやく乾かわかさ
 はまたちまぢ亂らんをこれとも重息じゆうじきの諸將帥しよしやうしゆ是こゝに

死をいふはものかきおゑんこの一挙いっく伐やぶめつ
 土のふべ

重修真書太閤記十一編卷之廿八終

重修真書太閤記十一編卷之廿九

武列河越城の事

并山前四郎左衛門尉武勇の事

武藏國入間郡河越といふ處ハ秩父下野權守重綱の次男秩父次郎大夫重高ヲ知父ありけり是の子重頼河越太郎と稱せしけりそれより代々相續してこの處に住せし後ハ上杉扇谷の所領とありしけり寶徳元年鎌倉持氏卿の末子永壽正丸を鎌倉へ還御かゝりらせ關東の公方と仰ぎたてまひる左馬頭成氏卿の御ことけりや

大隅記十一編卷之廿九

後扇谷の修理大夫持朝ハ持氏一亂のとき安房守
憲實一味の最末の世の中いふかしく大切と思
ひなほみより出家して道朝と號し子息彈正水野
顯房ミ家督成りて右京亮憲忠を婿とちしその
身ハ河越子隱居し顯房若年の間ハ家臣尾越の太
田備中守資清を以て陣代となしけるなり顯房こ
の時とのかみ十五歳去りて左馬頭成氏卿次弟
み年長したまひくハ御父持氏卿からびみ御兄春
王安王をへり上杉のため滅びたまひしこと成
遺恨み思ひしかり顯房ハ扇谷の館みあはれと
稀ははれみハ河越みの住たりけり扇谷の館み

あらはれハ終者まゝ時を得てはしきぬみの申か
しけるみより享徳四年正月五日左馬頭成氏卿武
外上列の敵とし退治のため鎌倉を首途あつて武
藏國府中高安寺に御陣成めされしをそははれ
へり前ハ誅せられし管領右京亮憲忠の弟兵部大
輔房顯まゝ上杉一家の長者武藏の守護代固懸鼻
和の上杉右馬助憲信入道性順等と共に顯房ハ河
越より出張し同廿一日分倍河原に合戦しける
み上杉一家たかくかひまけ性順入道深手を負から
くして高幡寺まゝ引去りてははれし葉を以
腹をりて失たるこの人の安房守憲實と後弟違ふ

六月己二編終りし

大内記 上杉一族入てゆたのためいそやぐみ思ひ軍の
進退もこの入道をたのうねふみ如斯ありゆけ
ハ殊まかかうこあへり同廿二日のいくさみも上
杉方入てたの目まらたる羽續大石以下の歴々多
くうと上杉勢敗北しけるみよの顯房後殿して
味方をいさめ踏とまひて戦ひかの手の者
多く戦死し我身も深手負てけむハ河越までハ至
まゆり以夜瀬といふ処みまこれハ自害したる行
年廿一あるべし持朝入道ハ生長をたのこころハ
る鍾愛の嫡子自殺しける我いこころハどもある
べきから縁ハ十二歳ありはふその弟房朝を顯房

の跡目とかハ河越城もまさせたりこの時より左
馬頭成氏卿も鎌倉大倉の御所を出御あつて武列
の府中まへハ下總古河下河邊みらひらせたまひ
關東麻の如くこころハこの河越の城も淺間
ありとこ長祿元年太田資長をめさし今河越の南
波の館を三芳の郷へらひ要害を建立らせたり
まかちちこの城乃大手ハ三好天神と宇佐八幡宮
鎮座あり彼天神と申ハいゆのこみよ御垂跡や
あまじん靈威如何ある故やらん神体ハ神前の
莊嚴ふも五本骨の扇をかけらせたり神秘のこ
あら縁ども扇ハ風をかびかく炎熱を去形迹ハ如

大内記 二編 卷子乙

何やうこの城より敵をかびけ悪徒をしりぞけ國
郡を治むべし事ありめよとてふ人大き賀
申けるといふ其この房朝の代形つけり房朝のち
修理大夫政真といふ山内乃管領房顯文正元年二
月早世ありしその嫡子顯定十四歳にて管領
ふ任し民部大輔ふ任比同二年九月六日持朝入道
卒去あつし其の修理大夫政真年長たるを以て山
内の管領かたとも河越を以て一族の長者と仰
ける形つたはり文明五年十一月廿四日政真廿
歳ふ率したしの弟の定政を以て家督とあり修
理大夫ふ任し河越城ををらめ政務の事をへて太

田道灌入道これ成執行ひしとも持朝の時長尾
尾張守景仲入道昌賢の内ごめたる舊規ふよりて
私かつつけし高谷の分國よく治りたるはより
は間大将五子も出張したまへども河越の城堅
固にして兵糧運送の便宜をやくべしとて
く道産昌賢兩入道の功といふへし同十年正月朔
日成氏卿と兩上杉と和睦ありたるはより廿四日
定正河越みかへり顯定の平井みりたまひし
同十八年扇谷執事長尾昌賢入道の孫四郎右衛門
尉景春後弟の修理亮をよび叔父の尾張守忠景を
うらみ謀殺せしけりを道灌定正も尾張守父

子ハ庶子形ノ景春ハ嫡々形ノもやく庶子の寵を
志ラズけて嫡子のうらみをやさらげたまへべし
と申まらども定正これ採用ひたまふべし
於て景春ハ隱謀を入道ニ悟られしをいかつ尾張守
父子ハ寵をうまひんとせしを恨み景春はいほ
謀叛して山内頭定正まかひけり頭定これを入
ける哉定正いかつて頭定ニ景春ハ叛逆人形早
くこの方へ出たまへと申されし頭定はこれを
たのみてさしこの形只この事の起りの太田道
灌形といふれしかは道灌糟屋の館ニ引こめは
是ニ於て七月廿六日西上杉の兵を以て糟屋へ押

寄けるも道灌高見原よりあいでて戦死したるが
かたりのち扇谷の侍どもはしも忠あつ誤あま
道灌を殺さぬ事たのむかりははる形を君の
手ニ属して非道の死をせんよりいと河越を出て
山内の手ニまかひけるも定正の嫡子朝良
の執事ありしは曾我兵庫頭を河越の城主とさし
その子豊後守哉江戸の城ニ居らむとすこれ河越
の城主の一變せし形なり
或云上杉扇谷の流河越ニ居れしとどもこれハ
館はくろみて城ニあらは城ハ太田資長のまづ
く知ありよつて道灌滅亡の後城主もかちつ

といふ

是より西上杉確執して法ひま十一月廿七日定正
 顕定をうらんとく。須賀谷原まで出張ありかこ
 も定正俄に發病しけしに大場の館へ引かへしけ
 はみより山内より江戸川越の西城をとつかここ
 明る年二月より夜晝九十餘日せめしかとも城の
 要害より川の落しに河越城合戦のきめなり
 明應三年十月五日定正五十一歳みく卒に家督の
 五郎朝良なり朝良の若年なる時として伊豆國
 の早雲入道箱根山乃鹿狩り事よせ人数を石橋湯
 本の邊まゝ操入終り小田原の大森式部少輔實賴

を追ひて以朝良怒てこれ成せめんと分國の勢を
 催をよしをまゝ早雲使を以て以來御旗下たるへ
 事より成申ふより朝良こゝろけ和睦をよひ
 けるまゝはみ永正元年九月廿七日山内の顕定并
 小子息憲房立河原よりちいぐ朝良とたつかひけ
 はみ朝良らちまけ河越の城み入て息継居たまひ
 けるを十月三日顕定入道可尊父子河越の城を取
 つかここ攻たけけはる二年の春よりつり和睦し
 て朝良の相列大場と武列河越の中間おれはとて
 江戸の城みおりのたすかこ河越軍の第二度か
 大永四年正月十三日北條氏綱二万餘騎入て江

戸へおしよせしは修理大夫朝興江戸に去て河
越よりこのは享禄三年の夏朝興北條氏綱を退治せ
るやとく河越より府中へうちいづく六月十二日小
澤原にて合戦しけるや上杉うちまけまゝ河越へ
ひきかへまゝはるは朝興天文六年四月廿日河越
みて卒しける末期は家督の朝定はむかひ我氏綱
とたくかみと十四度みまよふといへとも一度も
勝しとねし我死を候とも佛事作善をまてて氏綱
と合戦し氏綱の首を我に取らへよと遺言せしよ
よりまててその用意を候よまこへしかば七月
十五日河越の三の木といふ処へ氏綱數万余騎み

て逆寄みおしよせたり河越より左近大夫朝成
大将みて打出合戦しけるは朝成は平岩隼人正子
生捕と朝定の河越さして落たりしかこゝもた
まらひ松山の城に逃入たりこの時河越の城に
氏綱の手より山前信濃守を城代として出しをさ
たり氏康の代みは福嶋左衛門大夫綱成をよかる
まらはるは同十二年九月廿六日両上杉八万余騎み
て河越へよせまゝころ稻麻竹葦の如くまを間もあ
く取まをて攻ためる古河はまゝは左馬頭晴氏
同年十月廿七日河越へ御動座あり城中糧はきて
よみも難義ありけるよ城をく氏康さぬ方

六月廿二日

二

便して十三年四月廿日の夜八千余の兵をめてつゝ
 両上杉古河公方の御勢をべつ八万余騎の中へ切
 てつりけれのあまひまどとあを合し心を一つ
 みかしたるその共おとのあゝやとまれのわいこ
 二あらくは電光石火の如くみる朝定ついに戦死
 あり氏康勝利を得たり志ろはま氏康多目周防守
 をしてあげ螺をふかせ諸軍をあめめ松山に入
 て勞を休めしとかや是よりして河越の城北條の
 持とつり天正の頃へ山前上野介とれを守るに
 上野介の小田原よあめつりしに當城入の四郎左
 衛門尉を大将みてその弟左近大夫郎等入の松井

八郎左衛門尉谷村勘三田村玄蕃市村一学あんと
 をもちめら二千餘騎を籠たりつり志ろはま四
 郎左衛門尉諸士をあめめ申けるに今度味方の
 城々上列松枝叢輪沼田厩橋下野の佐野足利皆川
 結城とろ落城し近邊ふても鉢形松山岩槻八王子
 かと合戦必死入及ふよありはまに當城いらま
 難義入及ふとも加勢のためをかけしに只おめ
 不どいくさして叶えぬとそを戦死をゆるみ思
 案もか一人壽百年といへども世流季入をよひ七
 八十を上壽とろ五六十を中壽とい我までみ四十
 歳たとひ上壽を得ともきては半をきぎころ何程

のたのこありさう累代の君恩我忘却一父祖の
面を潰さべやといさめられいげとも最さこそ
ぞんをふかすとたのめりげも答へたれハ四郎左
衛門尉もよみ嬉しくおもひ酒樽いくいとかく開
きさのの肴を調してよもをから酒宴して敵
をよの心の内こそ括くけし寄手の筒井伊賀守
定次寺澤志摩守廣高生駒雅樂頭親正を大将と
て一万八千餘騎四方より取かこここれをせめく
まかり

流布本寄手の中ハ筒井順慶法印を志は以誤か
順慶法印ハ天正十二年八月十一日寂おとハ

こへ出へき理か寺澤志摩守廣高ハ越中守
廣正の嫡子なり廣正六万石を領して米奉行か

此城平城おれとも堀幅ひろきうへハ秩父高麗の
谷川我せを入たせハ水濟々として處ふより四五
十間より百間ふりをよハ水底ふかくして泥治か
ルハ船をさくべき棹もか！在家を壊ちて堀を埋
めんとときせハか孫も焼もらふてちかきハ一宇
もか！たお！筏を組も乗入ハ鉄炮を以て是を
ちちさくむハ休むとも寄手ハ大軍なり無二無三ハ
乗いらんと筒井勢真先もさくむを城中より筒先

を打ちつゝこれに射る手負死人の山の如く因て
使者我を河越の城堅固にしてよせて毎度敗北
を如何せむへや御下知をもちたてよめると言
上子をよびし殿下をこめや久し何と
も仰らば以奏者衆御氣色をうやひ河越の御沙
汰何と申はるやひせんやと伺ひし殿下か
る不ど河越の城はよくして寄手毎度敗北及ぶ
よし聞食たる河越の城といふは三十四年前見
し時今とさの相違あるは土地の平みして
沼多く川水の便宜よみしや外なりたるこの城
小城みしてか東山道ともよ不ど掛へてたれ

のそのまの捨をくとも格別上方往來の片まらげ
とあるべき地みり何ら以城入の山前上野の弟の
四郎左衛門尉さめりめへこの四郎左衛門尉の
東國みての指ありの男なり我れら必死みありて
ふせぎたらは筒井伊賀守の手入あまかへし
又とて寺澤生駒あどの寝おびれしや顔みても能
あらし眼をさませよといへやと仰らばそのち
の御敷奇屋構み入御あり前野半入召出は
御茶事としやの利休宗文あどまかり出しかの奏
者衆退出し筒井はかひみその通り申達し
の使者はそのよ引かへし河越みし上意の

太閤記上編卷十九

十

趣を申々れハ筒井伊賀守さま情おし定次う手
あまうと四郎左衛門尉と仰らゆか志うらは
明日ハいづれも當手の勢みて城門を乗やぶ
四郎左衛門尉う首をとほり定次うハのちを
以う二ハ一ハみまをさくへと下知しける
生駒雅樂頭寺澤志摩守二人筒井をいさめける
ハ川水自由にして池沼の泥ふ敵もむかひて
あそ討死もせむ泥や水も入て何とあるへ
き未代ハのめ笑ひあるべし我をがかと寝そ
也しやと仰らゆかよりの考へはよむかより
如此城々攻られしハ度々ありその時殿下の

御所置をりしと仰らゆかと仰らゆか
考へはよむかの城ハ要害みて北條家多年
えと也ハ兵糧王薬お事かへから但千人籠
るといへハ下々かけて千三四百人ハ丈夫もある
へ一日も費を米十三四石と積今年ハ春よ
二百八十餘日及べハその費を米二千五六百石
みをよむべし兵糧いうも多しとゆ又そのか
あるもの形ハ費を米ありき益か終ふハ兵糧
みはくハ期あるへか生駒う家もはくえハ火
箭の街ハ兵糧倉を焼べき何とて今まで用ひ
はやと仰られし処形ハよし今夜も用ひ申

大問已上編卷十九

べくは、此の筒井とのみも、役所を丈夫に御構へ
ひて城中より切ていづは節御せよとあるまじく
ひと申けしは伊賀守も實も理おけりつと得道く
きびしく仕寄をかくめ、城中の變をもち居たり
けり

流布本この次み加藤清正城將をせかはし事并は
木村又藏城中へ使者の事といふ一条ありて加
藤主計頭清正川越の城下よりいさう城中の体成
見せからし一奇謀をおもひはさ木村又藏を呼
いづ、その方城中へはかひい山前四郎左衛門
尉を説へといひ付けるみより又藏城門へ至

ア、時兵士一人たちいさう何事みやとらふ又藏
あさふはやう今日あさふさふと大切のこと
形う人伝てまいひやくとといふみより四郎左
衛門尉城中へ呼入對面しけしは又藏降参のこ
をとせけしは四郎左衛門尉弟の左近大夫と謀
る偽て降らんといふより、城記せり去りはみ加
藤主計頭清正小田原陣よりあさかひとと誤り
十七年十月の廻文み
素春關東陣御軍役の事
五畿内半役 中國四人役并四國同
坂より尾列みいさう六人役

大月己二編末士

北國六人半役
遠三駿申信この五箇國七人役
右任軍役之旨來春三月朔日令出陣攻平於小田
原北條可有忠勤者也仍如件

天正十七年丑十月十日秀吉御判

清正ハ九列肥後國熊本在城形也ハ此廻文の外
形又新撰清正記ハ小田原陣の時關白殿下よ
マクゴレハ此御書六通を載
兼而添筆ハ中納言山中之城へ今廿九日取掛
則午刻ニ乘崩レ城主の事ハ申及及及及首千

餘討捕其外追討不知數ハ然者明朝日箱根峠
へ為陣取至小田原面可手遣ハ之奈落去不可
有程ハ猶追々吉左右可申聞者也

三月廿九日御朱印

加藤主計頭殿

この外ハ四月八日卯月十二日五月十三日六月
七日七月十二日と合せて六通形御歸陣の時
岡崎まで御迎ニ參らばくとあり

重修真書太閤記十一編卷之廿九終

重修真書太閤記十一編卷之三十

河越落城の事

并山前四郎左衛門尉乃事

河越城中の諸士一同みいひくひく降参せんと云てよせて伐欺き油断せしめその虚に乘り夜討し上方武士の肝を伝ふき勢をよと山前四郎左衛門尉同左近大夫宵より兵糧あくまろはるをせ鎧の上紙の肩衣を着し相言葉成しめ子丑の刻に打ていでんと用意して多くは大手の虎口におりまの居たるまろはるの夜もやうやくふけ渡り

大岡記十一編卷之三十

戌亥の刻もまぎんとまはる大地たちあぢ鳴動
しける々次第ふをげしく揺りゆぐ一數ヶ所はく
まからへし櫓門扉あししくゆりゆぐけり入
より城中の老若男女あまれまどひ世々たぐいま
滅却まはかたらかたれ大木の根まぐの竹林の
中へちり入て泣きけびくはひまると有様實は
目もあてらまを越見えさるるりかたはれ本丸
の奥詰の丸の下は後棟と形くかけはくらたつ
兵糧倉より火いでて天を焦し燃あがりたる只今
らちいでんと大手の虎口ふあひまうし軍兵とも
いびまもあそそめ手引かへしけるみえや火

四方へまをり餘烟本丸ををひ書院廣間の屋根
一時は焼きたちくはれは黒烟まじりたる中より紅
の糸のをひらめくまをろしあんとつみまをり
那し夜討もはるる形から眼前は妻や子のけり
ふむせふ哀も見まてわくは是をたまけんあしけ
るらちま夜々をやはのしと明くはれとゆ火を
増々盛まやけはれり旭のあかほころ本丸詰の丸
二の丸かけく小屋し一字のあらは焼失はきて
城外を見つせは降参成約せし又より陣々の仕
寄成ひまのけ楯竹束りかぐまらみ取収めまると
平常の体みて鎧甲したるものも形くあえれあれ

不ど油断したる処形つ火事のかつりせば一定目
 ざらしき働きたりしらんとの成と後悔きれとも
 今の詮か！山前四郎左衛門尉同左近大夫松井八
 郎左衛門尉田村玄蕃市村一学かといふものとも
 いひしり戰場ふいのちを棄てやと張詰たる氣も
 くらむ如何ふせやと震のこせし堤のなり寄
 手をこれの昨日までの勢ハそのまゝ持口くま
 そかへたる上も佐竹宇都宮皆川佐野かんとも爰
 ふとせ加えつくと見えて白地は月出したる扇の
 旗まゝの紺地は三巴白地は二巴紺地は蝶あるひ
 とちぎりの旗澤瀉のちかかと武藏上野下野常陸

不名たるは兵士の家の紋次第しし立法は秘に
 此のその勢片ふめて八九万も及ふべし又それ
 より遠くへびて只今よせきつは勢ありあつ
 見れば赤地は白く九巴まゝも篠丸は飛雀あるひ
 の白地は紺の梅鉢の旗馬けり成上て駈たつる
 此れも林より林のまてまで法をきたれは三四万
 のありぬへし城中のどのともこれ又氣法は逆勢
 法をけるみや一人落二人おち夜のあくはまでハ
 九七八百も何りの兵とも夜明をゆるるるハそ
 のらみ五六十人まきぎはつたり四郎左衛門尉よ
 ども本意あげよらちあんど弟の左近大夫をたづ

ぬるふ何地ゆきりん音りせはさしきみさこれの落
りせしはげくみ在やと城中をのまはかきりくは
かしけるみ本丸の焼跡よりめり寝入居たり
いらみくと呼おこせとも應りせは死したるみ
やと見れは息の出入たうかぬる阿まうの不思議
みうちようくささかかば斬々み
て眼を見ひらき四郎左衛門尉をきて大に驚き助
けたまへくと泣りばはさ何さぬめのけの
如く去りても寄手と降参を約しける時刻も既
あかひささうはらハ四郎左衛門尉一人まの寄手
の陣入りくらしやとおのひ鎧ぬぎきて越後布の

帷子よおふく白布の内衣を着く葛のまおみ緞
子の肩衣かけ一尺二寸の服差も三尺二寸の刀さ
さし鹿毛ある馬も黒鞍をきてちのりめり中間
一人み鎧かけさせ城門をひらきて志げくと
乗出ける跡ははきて松井八郎左衛門尉田村玄
蕃市村一学をりめ三十餘人よをざはりたり志り
はみそのうみ五六町と覺えし寄手の陣あるみ行
ともゆけとも至りのりははら不思議と向ふを
見せの寄手の陣は不ど遠しこれのいりみと左右
をくれ見おせぬ野山の林の中形う河越の城下
みかたは処のあかりしをのをとおのひ付三十余

又一所^{つら}下居^{くだり}てありき何處^{どこ}やらんとおめへども
はらよ見^みあらし知^しまあらは松井^{まつい}を呼^よておくをい
まの佐^さゆやといへと答^{こた}もせ次^{つぎ}田村^{たむら}市村^{いちむら}いひち行
らん影^{かげ}もかき四郎^{しろう}左衛門^{ざゑもん}尉^ゑまきしあせれは
あても正^{ただ}しく河^か越^この城^{しろ}も今朝^{けさ}まであましそめを
と心^{こころ}をいひめ眼^{まなこ}をねぶらまきし去^さて見^みれは河^か越^こ
より三十餘^{さんじゆ}里^りをへぐてたる關本^{せきほん}の里^{さと}みてぞあつ
ける四郎^{しろう}左衛門^{ざゑもん}尉^ゑあまし不思議^{ふしぎ}おれは何^{なに}とお
く襟^{えり}みかけたる肌^{はだ}の守^{まも}成^{なり}ひらき見^みゆは道^{みち}了^り權^{けん}現^{げん}
の御^ご影^{かげ}水^{みづ}もひらき十^{じゆ}し如^{ごと}く志^{こころ}とく濕^ぬりてあつし
が守^{まも}袋^{ふくろ}はぬれもせざるまこの御^ご影^{かげ}のぬれくあそ

あやしけれ此^{こゝ}りころの父^{ちち}信濃^{しんぬ}守^{まも}り知^しれありけし
ハ最^{さい}乘^{じやう}寺^じの檀^{だん}越^ことく如^{ごと}く在^あるの祭^{まつり}祀^い怠^{たい}慢^{まん}あつりけ
るみより今^{いま}度^たの難^{がた}哉^やまきひたさひしうはるみて
も左^さ近^{ぢん}大^{だい}夫^ぶのいふせしやらんと弟^{あに}をおめひ出^で
以^も兄^{あに}の恩^{おん}愛^{あい}神^{しん}明^{めい}も通^とせしまや左^さ近^{ぢん}大^{だい}夫^ぶのいふ
權^{けん}現^{げん}の前^{まへ}夢^{ゆめ}ともねくらめしともねく茫然^{まうぜん}と
て居^ゐたりける兄^{あに}のころまきしは成^{なり}て大^{だい}よ
海^{うみ}さび手^て又^{また}手^てを取^とりかきしはひみ不思議^{ふしぎ}をや
合^あ權^{けん}現^{げん}の利^り生^{せい}哉^やふしおやまの夜^よハ寶^{ほう}前^{ぜん}も通^と
夜^よしけり

北條五代記又關本最乘寺開山了菴和尚の弟子

小道流といひしその大力ありけるか我活か
ら天狗とありて末世永々までこの山を守護せ
んといふ誓願を起して毎日あらしを行をい
まうとて天狗とありて山中に住と云云後
氏康の供みある人々大よらとやひをなす世
々々不思議ありやその天狗とやらん鳥
獸も形んといひ私語けし俄又大風吹落
樹木を吹倒し震動しけるみよるとも人恐怖
信成起しくかハたあま元の晴天とあり
といへり道了の真影ハ天狗の狐みよるか
圖ありて八十年とあり前美濃國龍泰寺和尚

最乗寺輪番の頃明覺道了和尚と追贈し真影を
あらため今の銅印採用ゆはとよかしくと善菴
隨筆といへり四郎左衛門尉道了權現の加被力
みよりて河越城をのかれいでといへり流布
本は加藤主計頭清正入攻らむ飯田前兵衛は生
捕れしを清正繩をとと式代して小田原へ飯
たりまといふも夢中の語睡中の記みて去る傳
へしともありけるみや

淺草觀音の事

并上杉勢小田原發向の事

武藏國豊嶋郡千束郷淺草寺といふも人皇三十四

代推古天皇の御宇定居二年戊子の歲の建立形り
本尊の聖觀世音菩薩むかし船堂西堂淨堂といふ
三人の浦人網をひくみ魚をかくらば朽木一の網
み入るとりて是をきて又網をひきなほみおふく
朽木を引おけりて取てきのむしめりてか
れり取をゆふとまへり七度あまの不思議なるを
形むこの木を取かへり草叢に置けるみこの木
より夜に光をまかひ草刈童十人何りけるる
を以て夜に堂をたくりてこれを安置しけるみ種
種の示現ありしかの打集りて朽木枝よく
拜む朽木みりあらて觀世音菩薩の像みて

いよけりてれより多くの歲月を経て三人の船
頭を以て三社の權現と崇め十人の草刈りりへり
十社權現と現れたる觀音菩薩の靈驗の身を三
十三みりりち十方衆生を六種に約し六道の群類
をさくひたはる浅草の地の東に前田川ありて九
青龍の浪清し西に忍の岡をびえり白虎の尾か
り結界に入り煩惱の垢をのめりてかして罪
障の雲たちあちみ消滅せり一色一香の樹下み十
界依正の花ちり瑜珈三密の窓乃前み一十七地
の行哉も一切衆生の願を充ちむかく乃如き靈驗

大開言二卷三十一

地我國に七箇所あり山城國に清水寺大和國に初
瀨寺壺坂寺近江國に石山寺尾張國に甚目寺安房
國に那古寺武藏國に淺草寺是なりとて清水寺
の觀世音の寶龜十一年の草創といふ淺草寺より
百五十二年のちなる初瀨寺觀世音御丈二丈六尺
天平五年五月十八日の開眼あり淺草寺より百六
年の後なり石山寺觀世音丈六の尊像天平勝寶
六年の草創なり淺草寺もかくあり事百廿七年か
かは舊跡ありを以て往昔より國司の尊崇大なり
なりといふなり天文四年八月十六日炎燒ありゆる
時の北條氏綱もあつても江戸城もあつけよハ觀音

堂ハ十八間四面密迹金剛の二王門鐘樓ハ至徳四
年の鐘我かけ三社權現十社權現錢瓶の辨財食
堂俗室庫裏諸門ありけりまゝ舊規ありかひ指
圖より元の如く建立ありけりハ北條家入て崇
敬めりとも篤かりけるより淺草寺の住侶日々
登城して護摩を修まより當城の留主荒川豊前
守宗勝をよび南條常陸介古市内藏之助大森土佐
守河田但馬守いれり觀世音を信仰し十七日十
八日どよかちらひ參詣したつける折しも越後
勢をよび石田治部少輔三成山岡對馬守以下よせ
てけりといふは飛雀の旗五六十流その次

大問二二編六二

大一大万大吉の旗横木瓜のたぐをき間もかく忍
の岡の山下までちかくとちよせころ荒川南
條古市の城中へ引かへも荒川の子も同荒五郎と
いふその何う身の長六尺七寸力の五六十人して
引うごかくかく大木を一人して自由も取廻し
けむのけむめて七八十人う力と見えころけるか
敵の旗の手茂見ぬら引かへはてのまきりさよ
某はたての得こそかへりひまきけむ敵大勢ぬ
は猶以て面白くころ山下城心さく姫ら池の中道
をたぐ一騎鎗をまはして馳たりけり越後勢藤田
能登守る先陣夏目舎人助七百余騎入て押々たぐ

荒川を見るより夏目下知しけるのむかみより馬
さくは侍のたぐそのからはその上も鎧兜を着は
常の羽織は小袴脚半と見えは合せては鎗の
鞘はそのうちたぐあはば我等陣を目みかけた
はと覺ゆはを油断させむと目をくらむころ海を
はけて待ところへもころまたたを以荒五郎ち
かめくまき馬かけもえこれ北條の侍も荒川
荒五郎宗武ぬ今日浅草寺の観音へ参詣しめる
下向のち越後衆の旗多く見受ては故何事も御
ころはやらんたかみ申承らんうためも羅向
てはといへは夏目侍さく出北條どの御内

大内言二終者三

みて荒川と名乗たまふの豊前守どのの御嬪子の
うこれの上杉弾正大弼の侍夏目舎人助みては
關白殿下勅宣の御使として小田原北條追討ある
みより主入るは上杉もかため手よつ發向仕るは
北條どのの御内ふはさく小田原へ御かつつあり
て我々を御待あるへくは途中の參會かひ兵具
はけたまふはかり我々の物詣みあそおとくまを
べけと我々左様の人打合して行くは早御敢り
あるべくは誰も臆して逃たまふとぞ申す一と
いひけれは荒五郎きくころめ物詣のかつりみ
武具を着孫の相手またらはといをゆくみや豊前

守り子といとて鎧兜を着せはとも目まかけとあ
敵をのやして荒川名字の汚名ぬぐたとひ赤裸
ありとも武士の意地を立申へ我々のをのそ
と總長の鎗をまじくとうち振く面もふらひ
馬を躍せさせいさの夏目侍ともおれ布とみ詞
を法くして理りを立るみ左様ある事やあるべき
その義からり取こめうち取んと跳まやく法を
馬みて踏せたるよみ処を突ふせ眼たくく間
み十四五人み手を負せ前後左右み狂ひまを法を
舎人助ふく荒川のかうととちとちやとける
ろ何とう仕たるらん荒川ろり出は鎗をそのを

大岡己二編卷三十一

そのまゝ乗たる馬の平頭を走らせり。突如走り、
馬の志をうり、跳あがり、くろひけし、舎人助、鞍よ
りたまたみ、下立たり。荒川を、舎人助をはかんと進
む。処へ、夏目、郎等五七人、落合たり。かの荒川馬
戎引、かへ、鞍をまひして、走り、と馬をあゆま
せけるを見て、藤田能登守あそれ、勇士や一人、當千
との誠、まかれ、をやいふ、あらん、たぐ、このゆ、よ
かへ、ま、残念、なり、五六人、して、追かけて、荒川、振
舞を、よやと、下知、ける、み、よ、越後侍、十三四騎
み、お、み、た、う、け、り、荒川、これ、を、き、つ、と、見て、馬、よ、り
下立、あ、さ、りの、小石、を、拾、ひとり、十三四間、み、お、ち、付

て、もの、し、と、う、ち、と、あ、い、ぬ、ぶ、て、あ、や、ま、い、真、先、に、進
り、侍の眉間、あ、れ、の、その、ま、く、我、こ、ま、た、を、れ
ふ、と、荒川、これ、を、い、目、ま、か、け、を、第二の、礫、み、今、一人
ハ、鼻、を、う、ら、れて、血、を、あ、ら、い、この、二人、志、う、あ、べ、き
人、み、や、あ、り、らん、の、あ、り、の、その、共、これ、を、介、抱、せん
と、立、ま、さ、り、荒川、を、追、せ、い、荒川、馬、を、引、あ、から、小
歌、う、ら、み、て、姫、う、池、の、不、整、を、中、道、あ、ゆ、ら、い、を、あ
か、よ、遠、く、の、び、い、か、り、越、後、衆、も、見、ぬ、よ、い、ま、て、追、も
せ、い、藤田、の、詮、あ、さ、を、あ、ら、たり、と、諸、手、の、その、笑
ひ、み、き、あ、り、た、う、け、り、加、賀、の、軍、兵、の、板、橋、よ、り、雑、司
谷、四、の、谷、渡、谷、を、打、こ、り、自、黒、奥、澤、を、ま、せ、ま、ぎ、て、池

大月三二編卷三十一

上よいころ本門寺陣をころし一夜をおかして
矢口のけりし上杉勢をまち合せ加瀬の小山に
旗をたてちかきけりし城をちめぐる藤澤にい
たり清浄光寺を本陣とありて後述しそのを
まぢぢらへ降参のその城あらため使者をよせて
小田原の本陣はいくさの日記を注進したりし
本關白殿下御覽ありし使者をめし出されし細り
これ茂詰問ありけるよその城の右手は大河の池
のあつゆるみかき夫より攻いらさるるかの城
乃後入の松の林のあつはるか今のかきみやかん
と仰らゆし使者まことし仰天しはりみしと

殿下の危やうは關東の城々をいひのまよ知せ
たまひしみやと恐る言上しけしひみやとよ
殿下の幼弱の時猿といはれり東國まで木傳ひ
あつぎしおつと仰らゆその猿冠きて關白よか
上り後一位の位よのぞきしみやと仰らゆ笑を
せたまひし御聲のたうさよ

せたまひし御聲のたうさよ

重修真書太閤記十一編卷之三十一終

重修真書太閤記十一編卷之三十一終

三都書林

三條通升屋町	出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
同 博勞町	河内屋茂兵衛
同 筋木町角	河内屋藤兵衛
日本橋通二丁目	須原屋茂兵衛
同 二丁目	山城屋佐兵衛
同	小田屋新兵衛
芝神明前	岡田屋嘉七
本石町十軒店	英子屋大助
大傳馬町三丁目	丁子屋平兵衛
横山町三丁目	和泉屋金右衛門
浅草茅町二丁目	須原屋伊八
筋違御門外藤籠町二丁目	紙屋徳八

四七

